

黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.90 (March 31, 2021)

第90号 2021年3月31日

以下に、木内徹前代表が2020年6月18日に会員に向けて出され、その後、学会HPでも公開されている声明文を再掲します。パンデミック下の2020年5月25日にミネソタ州ミネアポリスでアフリカ系アメリカ人のジョージ・フロイド氏が地元の白人警官デレク・ショーヴィンに殺害された事件を契機として、制度的な人種差別が過去から今日まで引き起こしてきた夥しい不条理で痛ましい死に抗議し、世界各地でBlack Lives Matter運動が日に日に拡大する中、「ここで沈黙を続けることは暴力に加担することと同じだ」との思いに急かされるように、木内前代表が書かれた文章です。本来であれば、2020年6月に明治学院大学にて開催されるはずだった第66回年次大会の会場で、代表として直接に会員の皆さまに伝えたかっただろうメッセージであり、また、本学会にとって重要な意味を持つメッセージだと思います。木内前代表が書かれているように、この学会は67年前の創設の時からつねに、人間の苦難に心を寄せ、他者の痛みに関心し、不公正と闘う世界の人々と連帯する姿勢で「黒人研究」を続けてきました。ここで改めてそれを確認し、その姿勢を受け継いでいきます。

黒人研究学会代表 西本 あづさ

STATEMENT ON THE MURDER OF GEORGE FLOYD

JUNE 18, 2020

Dear JBSA members and colleagues,

Across the world, people are horrified by the recent killing of George Floyd in Minneapolis, Minnesota on May 25, 2020. And his is only one of the most recent deaths among those who have long endured cruelty, indignity, and blatant police brutality. What was so chilling was the casualness of his killing: a police officer, with his hands calmly in his pockets, kneeling on the neck of a human being for eight minutes.

Over the last few days a global outpouring of anger and grief has been witnessed as communities across the world in the UK, Germany, Italy, New Zealand, Canada, and African countries, as well as the United States expressed outrage at the pointless killing of a man guilty of nothing but being black. This violence comes on top of the global pandemic that has had devastating effects on the health and economic security of millions of people.

I have been inspired by protestors against Mr. Floyd's death across the world, and also saddened by the fact that 66 years after the 1954 establishment of the JBSA, a system of institutional racism remains across the United States as well as Asian countries, including Japan.

As one of the protestors had the slogan on the placard, "Silence Is Violence," so we must say that indifference to human suffering must never be our own. Cries from our hearts to the pain of others must never be muffled. Our essential values demand that we are concerned.

As I mourn the death of George Floyd, I stand in solidarity with the millions of protesters in American cities and around the world and conclude by stating unequivocally that #black lives matter in the United States and Japan.

Toru Kiuchi

President of the Japan Black Studies Association [Term of Office: July 2015–Jun 2020]

例会発表要旨

10月例会 2020年10月24日 オンライン開催 (Zoom)

① 『ジャズ』にみる「身体と感情の所有を求めるジャズ」

伊東 えり子 (青山学院大学・院)

1920年代のハーレム・ルネッサンス期は、黒人エリートたちの文化活動に対して、大衆の黒人文化が花開いた時代でもある。トニ・モリスン(Toni Morrison 1931-2019)の第6作目となる小説『ジャズ』(1992)では、南部の厳しい差別から逃れて都会へと移住した主人公たちの再生が描かれている。モリスンは、エリス・シャペルとのインタビューの中で、「自分たちの身体が他者によって所有されていた奴隷や、子供時代に奴隷だった人たち、自分の両親が奴隷だったことを記憶にとどめている人たちにとって、ジャズは自分の身体の所有を求めることを意味し…ブルースやジャズは、自分の感情を所有することを表した」(シャペル 48)と述べている。本発表では、自己の人生を他者に支配されてきた歴史を持つ黒人にとってこの言葉はどのようなことを意味するのか、また、モリスンのいうジャズの精神が小説『ジャズ』にどう反映され、どのようなことを表象しているのかを考察した。

モリスンの考える黒人の音楽は、喪失を埋める慰めとなるだけに留まらない。即興性と多様性を表象するジャズは、その時の黒人の状況に対峙し、彼らが「自由」と考えていた「自分で選択した」人生を生きているという実感を呼び起こすものなのである。モリスンは身体を表象を用いて具体的なイメージをもって人物の感情を描写し、心と身体が共に連動していることを表わしている。小説『ジャズ』ではジャズという音楽を通し、まさに過去の歴史から蔑まれてきた身体を肯定し、身体と人間の持つ感情を自分のものとして主張し、自分の選択した人生を歩んでいこうとする登場人物達が語られている。主人公たちは、主流のハーレム・ルネッサンス期の文化活動の歴史の中で生きていることを自覚しないまま、ジャズの精神を受け継ぎこの時代の歴史を構築しているのである。

② ネラ・ラーセンの小説における言語と視覚性

小林 俊一郎 (一橋大学・院)

ネラ・ラーセンの小説 *Quicksand*(1928)と *Passing*(1929)はどちらも視覚・空間の記述の強度を一つの特徴としている。この点は人間の形象(キャラクター)において顕著である。先行研究においては多くの場合、視覚的なキャラクターの形象化はキャラクターの人種化と結びつけられ論じられる。このような議論は、人間の空間的、視覚的、あるいは身体的な特徴の知覚とそれがもたらす人種的な意味作用を自明とした上で、作品のテキストが認知されるうえでの人間と人種とをどれほど技巧的に模倣するのかという理論的な視点をもっている。しかしこのような先行研究の仮定とはうらはらに、近年の研究では、世紀転換期における都市、建築、その他の文化形態の空間的な再編成、経験的な生活世界における感性の再編、知覚の不安定化、それらに伴う人間や人種の観念の非決定性・流動性に注意が払われている。

以上のことを踏まえつつ、本発表ではネラ・ラーセンの小説作品において言語がどのように視覚的なイメージを産出しているのかを考察する。言語が産出する視覚的なイメージを視覚性と呼び捉えることでこれと(経験的)視覚と峻別しつつ、ラーセンのテキストにおいては視覚性の生産が空間や外部の言語に留まらず、本来視覚の条件とはならないような時間的・内的な言語の動員に頼っていること、それと関連して視覚性の編成が物質的なものだけではなく情動的なものにもよること、情動の傾向によって同一の指示対象の視覚性もまた恣意的に変容すること、などを議論する。

③ リチャード・ライトの未刊小説『幻惑の島』について

木内 徹 (元・日本大学)

リチャード・ライトの未発表小説『幻惑の島』(オリジナルタイトル“Island of Hallucinations”)は、最晩年 1959 年 12 月に完成したが出版に至らず、1976 年にエール大学バイネッキ図書館におさめられ現在も出版されないまま埋もれている。この小説は 1958 年に出版された『長い夢』(*The Long Dream*)(木内徹訳・2017 年水声社刊)の続編として書かれた。『長い夢』は 12 歳の主人公フィッシュベリーのミシシッピーでの体験が描かれるが、『幻惑の島』は 18 歳になったフィッシュベリーがパリに移ってからの体験がもとになっている。登場人物の一人メカニカルは、ジェームズ・ボールドウィンがモデルで、ライトはボールドウィンがこの小説のなかで誹謗中傷しているように思われる。この小説は、フランス語で roman à clef(ロマナクレイ)、つまり実在の登場人物や事件をもとにした小説といわれ、メカニカル以外の登場人物もすべて実在の登場人物をモデルにしている。『幻惑の島』のなかで起こる事件も、ライトが実際に見たり体験したりした事件がもとになっている。特に、偽の手紙を『ライフ』誌に書いたリチャード・ギブソン(Richard Gibson, 1931—)の実際の事件も小説のなかで描かれる。

この『幻惑の島』の結末は、仲間から見捨てられ自暴自棄になったメカニカルがノートルダム寺院から飛び降りて自殺する場面で終わる。この結末はヴィクトル・ユーゴー(Victor Hugo)の小説『ノートルダム・ド・パリ』(*Notre-Dame de Paris*)(1831)と酷似している。私はこの小説の序文を書いて、いつかアメリカの出版社から出版したいと考えている。

1月例会 2021年1月24日 オンライン開催 (Zoom)

① James H. Cone 再考-Black Lives Matter に寄せて黒人の解放の神学に見る「聖」と「俗」 山本 愛 (ゴスペルシンガー、ディレクター)

昨今のブラックライブスマター運動に非常に重要な意味を持つと思われる、黒人の解放の神学を改めて再考したいと感じている。なぜ黒人の命は大切なのか、と問われればすべての命は大切であると、誰もが言いたかっただろう。しかし、彼らはその唯一無二の不屈の精神を持ち、あらゆる困難を乗り越えてきた。その中の大きな柱が黒人的「キリスト信仰」である。ここでまた、皆さんの頭にはきっと、キリスト信仰なんて世界中にあるではないか、と、疑問を持

たれることであろう。

しかし、アフリカ系アメリカ人の中にあるイエスキリストは他のキリスト教信者とは違う価値観を持ち合わせている。それが Cone の言う黒人の解放の神学である。

アメリカ南部で 400 年もの長い間主にイギリス系白人による抑圧と暴力にさらされてきた。その中でいかに正気を保ち、前を向いていけるかということを彼らは音楽やダンスや詩や文学や、あらゆるアートで表現してきた。特に黒人教会で歌われてきたブラックスピリチュアルや南北戦争後のブルースは、その歌詞やスタイルは違ってもそれぞれが「霊歌」であると著書『黒人霊歌とブルース』で Cone は語っている。

神を賛美することと、現実の人間たちの泥臭い愛を歌うことも何一つ矛盾しない、自然な人間の姿であり、自己の尊厳を回復させるものであり、両方が無ければ逆に不自然になってアンバランスになってしまうのだと、黒人霊歌やゴスペル、ブルースは訴えている。それは、抑圧にさらされた黒人奴隷という経験と、あらゆる苦難を希望に変えるアフリカの伝統的文化とが相まって実現したものであるとも Cone の著書は雄弁に語っているのだ。「私がブルースなのだ」と神学者である Cone 自らが告白している点が、キリスト者として唯一無二の存在だと思わされる。故に「黒人の命は大切である」と敢えて言わせてほしい。

② ハイチの作家ジャック・ステファン・アレクシについて

三石庸子（東洋大学）

Jacques Stephen Alexis (1922-61) は 1955 年から 60 年の間にフランスの大手出版社から 4 冊の本を出版し、そのうち 2 冊が英訳された。2002 年にエドウィージ・ダンティカを共訳者として出版された三作目の長編小説 *In the Flicker of an Eyelid* (1959) は、身体を搾取されて死んだように無力な売春婦と労働運動にかかわる真面目で逞しい活動家が、互いへの思いやりに満ちた真の愛情を見いだしていく物語であり、1948 年の一週間を扱っている。1999 年に英訳が出た最初の長編小説との共通点は、大枠としての社会主義リアリズム、アレクシの文学論「ハイチの驚くべき現実主義」に由来する特有の感性豊かな描写、合衆国の占領 (1915-34) 下で生まれたハイチの民族主義運動である土着主義を反映する、民衆文化の重視である。違いは、2 人の主人公がともにキューバ人であり、ハイチ人よりカリブ人として描かれていること、キューバ音楽に満ちていること、前作はドミニカ共和国のトルヒーヨによる 1937 年のハイチ人虐殺を扱う社会的な物語であるのに対し、女性の身体をめぐるフェミニズムの身体的な視野が主題となっていることである。アレクシは 1961 年にカストロ政権下のキューバから、フランソワ・デュヴァリエ独裁政権を倒すためにハイチへ向かい、行方不明となった。自国だけでなく、カリブや中南米、さらにアフリカやアジアの解放運動に連帯意識をもって行動したと思われるアレクシは、のちに 61 年に結成される非同盟運動 NAM へ通じる第三世界における運動の先駆者であった。

③ トニ・モリスン『タール・ベイビー』におけるシェイクスピア『テンペスト』表象の変遷——キャラクターバンとサンを中心に

福島 昇(日本大学)

1981年、トニ・モリスンはシェイクスピアの『テンペスト』をポスト・コロニアリズムの視点から批判し、長編小説『タール・ベイビー』を著した。メレディス・アン・スクラが論文「ディスコースと個人——『テンペスト』における植民地主義の真相」の中で主張するように、『テンペスト』には二つの異なる解釈がある。一つはハッピーエンドで終わるロマンス劇、すなわち赦しと和解をテーマとするヨーロッパ中心主義の理想主義的な作品解釈である。この伝統的な解釈はもう一つの修正主義的な解釈が生まれるまでは支配的であった。スクラが主張するポスト・コロニアリズムに基づく修正主義的な解釈は従来の非歴史主義を批判し、英国の植民地主義(コロニアリズム)のテキストとしての『テンペスト』に焦点を合わせている。スクラの視点に立てば、『テンペスト』は言うまでもなく、植民地主義を正当化するプロパガンダである。

ニコール・N・アルジョーがモリスンは『テンペスト』を『タール・ベイビー』に組み入れ、さりげなく言及することによって、彼女の影響力の幅に注意を向けさせていると主張しているが、『タール・ベイビー』には随所に『テンペスト』との深い影響関係が見られる。マリン・ラボン・ヴァルターがモリスンはポスト・コロニアリズムの視点から、シェイクスピアの『テンペスト』の新解釈を試み、『タール・ベイビー』を創作したと主張しているように、モリスンは伝統的な解釈である非歴史主義を批判したスクラの修正主義的立場に立っている。モリスンは『テンペスト』を「理想的」な読み方と「修正的」な読み方の交点に置き、『タール・ベイビー』のサンの中にキャラクターバンの像を読み取り、人種問題の根深さを厳しく批判しながら、『テンペスト』の改訂版として『タール・ベイビー』を創作したのである。

会員からの投稿

古川 哲史(大谷大学)

Note: The following text is my brief closing remarks in English for the Japan Black Studies Association (JBSA, est.1954)'s 65th annual conference held at Ritsumeikan University in Kyoto (June 22 and 23, 2019). The conference theme was “gender and sexuality,” and its program is included in the JBSA's *Black Studies* (No.89, March 2020). Since I have been asked to share my remarks with others by some JBSA members, I present here its text. (During my speech, I also showed a few slides/photos including “The Island of Zanzibar in Tanzania” and “A Classroom in a Prison in Ohio, the United States.”)

***Closing Remarks (June 23, 2019)**

Knowledge Should Be Power to Unite Us

— Closing Remarks for the JBSA 65th Annual Conference in Kyoto in 2019 —

Furukawa Tetsushi

Vice-President, JBSA & Professor of World History, Otani University (Kyoto, Japan)

Now is the time to close our conference.

First, I would like to thank everyone who helped us to organize this conference. And, as a Vice-President of the Japan Black Studies Association, I would especially like to thank our distinguished keynote speaker, Professor Crystal N. Feimster of Yale University for coming here from the other side of the Pacific. So, let us thank Professor Feimster very much again. Then, my special thanks goes to our Secretary-General and Chair of this conference, Dr. Sakashita Fumiko. As you know, without her hard work with excellent academic knowledge as well as business skills (which many of us do not have), we could not have held this conference today. So, Dr. Sakashita, I really appreciate your work.

Now, let me conclude our conference.

When I was twenty years old, a young Japanese student, I was in East Africa. I studied African history and culture including the Swahili language in Kenya for six months. And then, I walked around East Africa for another six months. When I visited the island of Zanzibar in Tanzania, which was once the center of the Indian Ocean Trade, I was taken to a house where some Japanese women called *Karayukisan* used to live. *Karayukisan* literally means “women going for China or abroad.” But, most of them were sent to East and Southeast Asia as “sex workers” from poor villages of Western parts of Japan, from the middle of the

19th century to the early 20th century. In Japan, I knew a little about *Karayukisan*, however, in Zanzibar, I was quite surprised to know that they even reached East Africa or some in Cape Town in South Africa in the 1890s. Some of them in Africa engaged in small businesses there. This “encounter” with *Karayukisan* became the beginning of my serious and academic interests in historical relationship between Japanese and Africans. Since then, through studies of Japan–Africa relations, I have learned a lot of diverse connections in world history.

Exactly ten years later, I was in the United States. After studying history of Africa and the African Diaspora at Ohio University, I began to teach classes at the university as an instructor of Japanese language and culture. Then, I found a teaching job inside the state correctional institutions. I became one of the teachers of its cultural education program. I taught many prisoners or “incarcerated students” inside six state prisons, from minimum security to maximum security levels, for three years. I still appreciate Ohio University and Ohio State Correctional Institution for giving me such a teaching and learning experience of a lifetime, and it also served as my driving force to keep studying American history and culture as well as Japan–US relations.

Above all, my first-hand experiences inside correctional institutions in Ohio taught me a lot about human, though I sometimes had a hard time with inmates and prison officers. (When I was an undergraduate student at Hiroshima University, I studied philosophy and peace studies, and the knowledge I gained in those days also became quite useful survival tools inside those closed facilities.)

So, let me finish my closing remarks now. Through my actual, not virtual, experiences in East Africa and the United States, I have learned a lot of connections or relations among people both locally and globally. Since ancient times, we have had shared so many things globally. Even though we tend to see or we would like to see differences among us, we share common things more as humans. Also, I have learned the important issues regarding academic knowledge and perspectives. They include issues of “decolonizing the mind” and “decolonizing the academy” in current unequal global academia.

At my last year’s JBSA closing remarks, I said, “knowledge is power,” and “knowledge should be power.” Today I would like to say, “knowledge should be power,” and “knowledge should be power to unite us, not to exclude one another.” “Knowledge should be power to develop equal partnership among us,” and “knowledge should be power to fight against current exclusionism seen in our everyday life to the global political arena.

I firmly believe, Black Studies or Africana Studies can provide such knowledge and perspectives, and I hope this conference held in Kyoto, Japan, has given you learning and memorable experiences. I am quite happy to meet all of you here, and hope to see you again in the near future. Thank you.

赤松光雄先生追悼

加藤 恒彦(顧問、元・代表)

赤松光雄先生が本年 2 月 20 日にお亡くなりになったという知らせを古川哲史先生から受けた。1926 年のお生まれだったというから、私より 21 歳年上で、恐らく 94 歳の長寿を全うされたのだと思う。最近、全国大会や例会の会場でお見受けすることも無くなっていたので、どうしておられるのだろうかと思ふことがあった。

実は、赤松先生は、1967 年、私が神戸市外国語大学の 1 回生の時に英語科目のうちの一つを教えてもらった恩師でもある。54 年前のことであるが、今でも授業中の赤松先生の姿を鮮明に覚えている。そしてゼミは、会の創立者の貫名美隆先生であった。こう言うと外大で一回生から黒人文学の手ほどきを受けたような印象を与えるかも知れないが、赤松先生の教材はアメリカ南部の白人作家アースキン・コールドウエルの短編で南部の貧乏白人の惨めな生活を描いた「タバコ・ロード」(1933 年)だった。貫名先生にも英語を習ったが教材はホイットマンの詩集『草の葉』(1855 年)であり、そしてゼミも私のテーマはセオドール・ドライサーの『アメリカの悲劇』(1925 年)だったこともあり、貫名先生から黒人文学や黒人差別のことを聞いたことはなかった。私が黒人文学に初めて触れたのは、会の創立者の一員でもあった英語学の小西友七先生の授業で読んだりチャード・ライトの「北部へ行った男」という『ブラック・ボーイ』(1945 年)に続く短編であった。そしてそれが私の黒人文学への関心に生涯消えぬ関心の火をともしたのだ。そして、大阪市立大学の修士課程を終えた頃に、故古川博巳先生の『黒人文学入門』(1973 年)を読み、それに刺激され、ラングストン・ヒューズ、ジェームズ・ポールドウィン、ラルフ・エリソン、ジーン・トゥーマー等の作品等へと関心が広がって行き、黒人文学研究をライフワークにするという決意の下、1975 年の全国大会で入会したのである。それは、会の創立 20 周年を迎える時期であったが、その間、貫名先生の神戸外大での教え子として会を精力的に支えて来られたのが、古川先生と赤松先生のお二人であった。以下は、『黒人研究』のバックナンバーに散見するお二人に関するエピソードを私なりにまとめたものである。

当時、神戸市立外国語大学に会の本部があったこともあり、外大の専任教員であった赤松先生は、貫名先生の後を継ぐ形で、1984 年から 1992 年まで会の代表を務められ、その後、古川先生が、1996 年まで続けられた。

戦時中、旧制中学生であったお二人は、学徒動員法の下、赤松先生は、戦地に一兵卒として従軍、古川先生は三菱造船所に徴用され、石油タンカーの建造、日本の潜水艦、ドイツの U ボートの修理の手伝いに従事されたという。神戸も米軍による空襲に晒され、広島と長崎への原爆により終戦を迎え、マッカーサー率いるアメリカの進駐軍が日本に上陸するのであるが、そのなかには黒人兵の姿もあったのだ。

赤松先生は、戦地から帰還した翌年の 1946 年の春、焼け野原となった西神戸に仮校舎が立てられていた神戸外事専門学校に復員服姿で登校したそうだ。ある日、赤松先生が登校したところ、グラウンドで粋なジャージーのユニフォーム姿でただ一人サッカー・ボールを蹴っている学生がいて、それが古川先生だったという。「少々変わっているが熱心な男だな」と思ったことが切っ掛けで赤松先生が声をかけ、付き合いが始まったという。赤松先生は古川先生より 1 歳年上であったが、入学は同期であったという。そして、大学では GHQ との連絡事

務所から派遣された役人から、アメリカの自由と民主主義について講義され、若かった彼らは、戦いに敗れたとは言え、それを喜んで受け入れたのだ。

西神戸に建てられた神戸外事専門学校の仮校舎の近くには、兵舎が立てられたのだが、それは黒人部隊の為のものであり、西キャンプと呼ばれたという。そして、仮校舎が次に移転した神戸の三宮近くに建てられた兵舎は白人兵のもので東キャンプと呼ばれた。赤十字病院さえ、別々の建物にわかれていた。そして白人兵と黒人兵の間で時々争いがあるという。そうしたなかで、赤松先生や古川先生は、「アメリカは自由と民主主義の国である」という話に疑問を持ち始めたのだと言う。

そして赤松先生によれば、貫名先生は学生とのセミナーの時、「君達がアメリカのことをどう思おうとも、アメリカはその本質を知らなくてはいけない国ですよ。…そして黒人問題を無視してはアメリカを本当には理解できませんよ。」と語っておられたと言う。人種隔離された米軍兵舎は、貫名先生の言葉の正しさを証明するものとして学生たちの心に響いたのだ。

そして神外専の大学昇格問題が起きたとき、学生たちは、署名運動に立ち上がり古川先生も、黒人兵をつかまえて「アメリカは民主主義と自由の国だ…」と議論を吹っ掛けようとすると、その黒人兵は、黙って自分の顔を指さした。そこで初めてアメリカの差別の厳しさを思い知らされたと古川先生は赤松先生に語ったと言う。

神外専は 1950 年には神戸市立外国語大学に昇格し、東六甲山麓に引っ越した。古川先生は、すでに県立芦屋高校の教員に採用されていたため、神戸外大は中退となったそうだ。赤松先生は、外大を卒業した年にガリオア奨学金(フルブライトの前身)で渡米し 1954 年に帰国、外大の助手に採用された。そうした二人が顔を合わせたのは、外大の英語科教員と卒業生からなる研究会の例会だったそうで、そして、ある日、古川先生は、赤松先生を半ば強引に自分の下宿に連れて行き、こんこんと黒人問題や黒人文学への関心を語ったという。赤松先生もアメリカでの一年の留学生活で、南部を旅行し、聞きしにまさる人種差別のひどさを体験して来られただけに、その話を頷きながら聞いたという。1954 年は、アメリカ南部の公立学校における人種隔離制度を憲法違反と断じるブラウン判決が出た年であり、日本では神戸外大の教員三名と卒業生 5 名の計 8 名で「黒人研究会」が発足した年であったが、赤松先生は、その翌年、研究会の後、三宮のある地下食堂で貫名先生と古川先生の勧誘を受け、入会されている。

赤松先生は、ロレイン・ハンズベリーの『ひなたの干し葡萄』論を始めとする黒人の戯曲の研究を主な研究分野とされていたが、「会」としての出版物の一つ、『ハーレム—USA』(1968 年、未来社)の編集にも中心的に関われ、解説も担当されている。本書は、黒人解放の総合誌『フリーダム・ウェイズ』の特集号から発展し単行本として、その 4 年前に出版されていたものであるが、この雑誌の編集者で、詩人としても活躍していたジョン・ヘンリック・クラーク氏宛に、「会」の活動を紹介した上で、「会」から 10 周年記念号へのメッセージを求める手紙を送ったことを切っ掛けに、手紙のやり取りが始まり、クラーク氏より、本書についての日本での出版依頼があり、「会」としての刊行に至ったものである。

このような先人たちの足跡の上に自分たちの今があることを感謝しつつ、追悼の辞としたい。

入 会 者

氏名:白木三慶(しらき みつよし)

所属:The State University of New York at Buffalo, Transnational Studies Department,
PhD student

自己紹介:1930年代アメリカの文化に関心を持ち、現在はリチャード・ライトについての博士論文を執筆中です。日本ではアメリカ文学を研究していましたが、2016年、マイノリティ文化を研究対象とするニューヨーク州立大学バッファロー校トランスナショナル・スタディーズ研究科の博士課程に入学しました。この研究科の授業を通じてアフリカ系アメリカ人の歴史や文化の一端に触れることができました。博士論文ではプロレタリア文学という枠組みからライト文学の解説を試みています。よろしくお願いいたします。

氏名:大塚 一帆(おおつか かずほ)

所属:一橋大学 言語社会研究科 修士課程一年

自己紹介文:卒論はケルアックの『路上』を題材に書いていましたが、修士からは R&B/Rap ミュージックにおける“Blackness”と“Masculinity”について研究をしています。修論構想としてはギルロイがデュボイスの二重意識に基づいて展開した議論等に依拠しながら、音楽における開かれた“Blackness”について論じてその例としてフランク・オーシャンの作品を分析していく、といったものを考えています。いわゆるブラック・スタディーズについて学び始めたのは今年からなので浅学かとは思いますが学会の皆様との交流を通じて色々と学ばせて頂ければと存じています。よろしくお願いいたします。

氏名:高橋 明子(たかはし あきこ)

所属:法政大学修士課程

自己紹介文:アフリカに滞在した経験からアフリカの文化、アフリカ文学に関心を持ち、社会人入学で、修士課程でアフリカ文学、アフリカ系作家の文学を研究しています。特にハイチ系女性作家のエドウィージ・ダンティカの作品、アフリカ系女性作家のチママンダ・アディーチェの作品に関心を持っています。ジェンダー、人種やポストコロニアルトラウマの視点で研究していきたい思います。これから、黒人研究学会に積極的に参加させていただき、一層の知見を深めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

氏名:若島裕樹(わかしま ゆうき)

所属:一般

自己紹介文:80年代から90年代にかけての、ブラックカルチャーの追求。ファッションや、その当時の流行について日々研究しております。音楽はもちろん、ソウル、R&B、ゴスペル、ヒップホップを中心にレコードを収集しております。私を救ってくれた、この黒人文化および音楽に対して何か恩返しのような事がしたいと考えております。どうぞ宜しくお願い致します。

(順不同)

退 会 者

氏名: 阪口 瑞穂(さかぐち みずほ)

報 告

会員による出版

三石庸子, 『カリブに生きる: 文献から辿る小地域の人びとの豊かな遺産』. 東洋大学出版会, 2020.

編集後記

この90号は、これまで以上に本会の記録として貴重なものとなった。昨年3月末に89号を発行して以来、一度休刊をはさんだ後の発行である。その間、コロナウィルスの大流行、世界各地でのBLM運動活発化やアメリカ大統領の交替など、社会はさまざま出来事を経験した。あわせて人々の生活様式と社会における既存の価値観も大きく揺らぎ、変化した。大学の授業方式なども変更の対応を迫られ、思うように研究の時間を確保しにくい状況にも関わらず、10月、1月共に密度の濃い例会発表が計六つもおこなわれた。いずれも大きな刺激を与えてくれる発表であった。また2月には、会を最初期から支えてこられた赤松先生の訃報を受けた。加藤先生がお書きになられた追悼文に目を通して、会員として本会の歴史の長さと重みを実感し、あらためて日々精進する決心をした次第である。

末筆ながら、赤松先生のご冥福を心より申し上げます。

(猪熊 慶祐)

＜編集＞ 黒人研究学会・編集部
〒839-8502 福岡県久留米市御井町 1635
久留米大学文学部・神本秀爾研究室気付

＜編集者＞ 猪熊 慶祐
gr0313sp(a)ed.ritsumei.ac.jp
ホーム・ページアドレス
<https://kmmstshuji.wixsite.com/jbsa>